

博士課程学位申請リサイタル

上田 友紀子 ピアノリサイタル

*Yukiko Ueda Piano Recital*

2018年12月18日(火) 18:00開演(17:30開場)

京都市立芸術大学 講堂

## ご挨拶

本日は、ご多用のところ、「上田友紀子 博士課程申請リサイタル」にご来場頂き、ありがとうございます。

私がフランツ・シューベルト (Franz Schubert, 1797-1828) という作曲家に魅せられて、早 11 年が経とうとしています。思えば、修士時代からの研究は、シューベルトの魅力を言葉で表現できるようになりたいという思いから始まりましたが、この 6 年間、彼への愛情と畏敬の念はますます深まるばかりでした。今回が学内最後のリサイタルと思うと感慨深いものがありますが、研究の集大成としての成果を皆様にお伝えできるよう、準備に励んでまいりました。

本日のプログラムは、私が執筆いたしました博士論文「フランツ・シューベルトの後期ピアノ・ソナタにおける反復と変奏——リズム・モチーフ<sup>1</sup>の分析に基づく考察」に基づいて構成しています。

「最後の三つのピアノ・ソナタ (第 19 番 D958～第 21 番 D960)」(1828) として親しまれる三大ソナタから一曲、それ以前の後期ソナタ<sup>2</sup>から一曲を中心に組みました。

シューベルトが D958～960 を「三大ソナタ」として構想していたことは、浄書譜に「Sonate I～III」という連続した番号を残している点からも想像できますが、実際に、これら三曲をそれ以前の後期ソナタとリズム面から比較すると、特に第 1 楽章に異なる反復技法が描かれています。シューベルトは、第 15 番 D840 (1825) から第 18 番 D894 (1826) までの四曲において、第 1 主題と第 2 主題の一部に同じリズム・モチーフを共有させている一方、三大ソナタにおいては、推移部とコデッタの充実とともに、それらに重要なリズム的関連がなされています。したがって、両者は、ソナタ形式という枠組みのなかで、それぞれに手法を異にしていると言えるのです。

《ピアノ・ソナタ第 18 番ト長調 D894》は、ハスリンガーによって名付けられた『幻想』というタイトルが物語っているように、楽曲のほとんどを静謐な世界が支配しています。それに対し、《ピアノ・ソナタ第 20 番イ長調 D959》は、建設的な主題が朗々とうたわれる (第 1、4 楽章) 一方で、剥き出しのデモーニッシュな感情があらわになる (第 2 楽章) —— つまり、楽章間での光と闇との交錯が大きな起伏(うねり)を生んでいるのです。

---

<sup>1</sup> 「リズム・モチーフ」とは、旋律的、和声的な特徴を度外視した、純粋にリズム的な短いひとまとまりを指し、一般的な「モチーフ」と区別する。つまり、音程関係が変化しても、リズムが変わらない場合は、同じリズム・モチーフと見なすこととする。シューベルトの後期のピアノ・ソナタにおいては、このリズム・モチーフの反復が主題間や形式区分間をつなぐ役割を担っており、作品全体を密接に関連付ける手段として用いられている。

<sup>2</sup> シューベルトが生涯を通じて作曲した 21 曲のピアノ・ソナタのうち、第 15 番 D840 (1825) から第 21 番 D960 (1828) までの七曲は、4 楽章制で統一されており、第 1 楽章はソナタ形式、第 2 楽章は緩徐楽章、第 3 楽章はスケルツォまたはメヌエット、第 4 楽章はロンド形式またはロンド・ソナタ形式である点が共通している。これらの共通点を踏まえ、博士論文では、1825 年以降に作曲された七曲を「後期」のピアノ・ソナタとして分類している。

このように、これら二つのピアノ・ソナタは対照的な性格を持っているわけですが、同じ「4楽章制」を取るなかで、ソナタ形式でも前述の異なる構造を持っている第1楽章だけでなく、第2楽章や第4楽章においても、それぞれに異なる形式を取っています。

シューベルトの短い生涯の中でも充実した器楽曲の創作期である「後期」(1825～1828)に作曲された、対極的とも言える二曲を演奏することで、多面的にシューベルトのピアノ・ソナタを捉えることができるでしょう。

また、《3つのピアノ曲 D946》(1828)は、ピアノ・ソナタより自由度が高く、ブラームスによって編纂された三曲です。第1曲と第2曲の密接な関係性は、シューベルトによって最終的には削除されてしまった第1曲の第2エピソードを本日演奏することによって、より明白になることでしょう。また、この曲を二つのピアノ・ソナタの間に演奏することで、シューベルトが「ピアノ小品」というジャンルについて、堅固な「ピアノ・ソナタ」と明らかに区別していたであろうことが浮き彫りになることは間違いありません。

ほぼ同年代に作曲された以上三曲について、「ピアノ・ソナタ」としての違い、ジャンルとしての違いを演奏をとおしてお伝えできれば幸いです。

最後になりましたが、これまでご指導を賜りました砂原先生、池上先生、阿部先生をはじめとする先生方、色々とアドバイスをしてくださった先輩方、支えとなってくれた家族、友人、リサイタル開催にあたって協力してくれた後輩に厚くお礼申し上げます。

それでは、最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

上田 友紀子

## Program

フランツ・シューベルト (Franz Schubert, 1797-1828)

ピアノ・ソナタ 第18番 ト長調 D894 「幻想」

Klaviersonate Nr. 18 G-dur D894

I. Molto moderato e cantabile

II. Andante

III. Menuetto: Allegro moderato

IV. Allegretto

3つのピアノ曲 D946

Drei Klavierstücke D946

I. Allegro assai

II. Allegretto

III. Allegro

—Intermission—

ピアノ・ソナタ 第20番 イ長調 D959

Klaviersonate Nr.20 A-dur D959

I. Allegro

II. Andantino

III. Scherzo: Allegro vivace

IV. Rondo: Allegretto

## Program Note

### ●シューベルト：ピアノ・ソナタ第18番 ト長調 D894 「幻想」

1826年に作曲され、翌年にトビアス・ハスリンガー(1787-1842)から出版されたこのソナタは、出版社に「幻想曲」と名付けられ、今日も「幻想」の名で親しまれている。

最後のピアノ・ソナタ D960 や歌曲《夕映えに D799》にも通ずるように、神秘的な静穏の空気が持続してゆくこの異質なソナタは、ロベルト・シューマン(1810-1856)に「精神的にも形式的にも完璧を極める」と言わしめた。静穏を極めるこれらの曲と異なる面があるとしたら、このソナタは舞曲の要素が色濃く反映されていることだろう。

シューベルトが膨大な数(総計391曲)の舞曲を残していることは、一般にはあまり知られていない。これだけ多くの舞曲が作曲された背景には、いわゆるシューベルティアードと呼ばれた友人たちとの集いが深く関係していると言える。このような集いにおいては、作曲家の曲の発表の以外にも、皆でダンスを楽しむことが主であったが、シューベルトはその場の雰囲気に応じて、即興でピアノを演奏していたようである。友人たちの回想の中でも、これらの場面は生き生きと描かれており、舞曲はシューベルトの音楽の下地とも言えるであろう。

「幻想ソナタ」にも、あたたかい友人たちとの交流の中に生まれた舞曲の要素が様々に感じ取れる。この曲は、そんな友人の中の一人、ヨーゼフ・シュパウン(1788-1865)に捧げられた。シュパウンは、シューベルトが在籍していたコンヴィクト(ウィーン少年合唱団の前身)で出会った10歳近く上の先輩であり、シューベルトも兄のように慕っていたことが手紙から見てとれる。大事な友人にこのソナタを捧げていることから、シューベルト自身この曲に非常な愛着を持っていたことがうかがえるのである。

#### ・第1楽章 *Molto moderato e cantabile* ト長調

ゆったりとした音楽の運びの第1主題と、より軽快さが増す第2主題は、静寂さをたたえながらも、優美な舞曲を思わせる。楽曲が始まって突如ロ短調に転調する第1主題や、展開部に攻撃的な性格へと変貌する第1主題の素材は、持続的な穏やかな調べに陰を落とす。

#### ・第2楽章 *Andante* ニ長調

後期の多くの緩徐楽章と同じく、五部形式(A-B-A-B-A)を取る。

主要主題の叙情的で友好的な性格は、前の楽章から引き継がれたものである。対してエピソードは、強烈な力強いもの、哀愁を帯びたもので構成されており、緩徐楽章を超えるドラマ性が描かれている。

#### ・第3楽章 *Menuetto: Allegro moderato* ロ短調

同音連打による主部の主題は、力強くもどこか土臭い性格を含む。対してトリオ部は、同主調ロ長調による幻想的な調べとなり、高音域による繊細で軽やかな舞曲である。

・第4楽章 Allegretto ト長調

ロンド形式 (A-B-A-C-A) を取り、C の中でも三部形式を取る。

田園的で素朴な性格をもつこの楽章は、ソナタ全体の中で最も軽快なロンドである。終始気まぐれで快活な舞曲の性格で構成されている。シューベルトのソナタにおいてしばしば見られるように、この楽章も中間に悲哀に満ちた激発を含む。

●シューベルト：3つのピアノ曲 D946

この小品集は、ヨハネス・ブラームス (1833-1897) の編集 (匿名) によって、シューベルトの死後 40 年も経った 1868 年に出版された。

第1曲と第2曲は「1828年5月」とシューベルトによって日付が書かれた自筆譜が残っているが、第3曲の自筆譜には日付が書かれていない。このことから、第1曲から第2曲は一つのチクルスを想定して作曲されたと思われる一方、第3曲は前二曲とは別の時期に書かれ、また単体で書かれた可能性もあるのである。とはいえ、第3曲はフィナーレを飾るのにふさわしい性格を持っており、確証はないものの、これら三曲は凝集的なサイクルと見なすことができるであろう。

・第1曲 Allegro assai 変ホ短調

A-B-A-C-A のロンド形式を取っていたが、第2エピソードが最終的に省かれたことで、三部形式 (A-B-A) となった。本日は第2エピソードを演奏するため、ロンド形式を再現する形となる。

主要主題の3連符の伴奏形とタランテラを思わせるリズムは、疾走による激しさと同時に愉悦感が感じられる。第1エピソードは遠隔調であるロ長調に転調し、一転穏やかな調べとなる。変イ長調の第2エピソードは、作曲家によって最終的に削除されてしまった部分だが、ゆったりとした舞曲を思わせ、それはやがて嘆きの歌へと変わってゆく。

・第2曲 Allegretto 変ホ長調

A-B-A-C-A のロンド形式を取る。

何度も回帰されるロンド主題は、シューベルトのオペラ《フィエラブラス D796》の希望や憧れを歌うアリアから取られた旋律である。第1エピソードは、陰鬱なトレモロによる劇的な性格、第2エピソードは、切れ目なく続く悲痛な歌となっており、両者ともにロンド主題とは対をなすものである。

・第3曲 Allegro ハ長調

三部形式 (A-B-A) を取る。

素朴で快活な性格を持つ主要主題は、シンコペーションによって裏拍を強調することで面白みを出している。中間部は一転、ゆったりとした静穏な音楽となり、同じリズムの反復による弛緩した運びの中で、どこか懐かしい歌が紡がれてゆく。

## ●シューベルト：ピアノ・ソナタ第 20 番 イ長調 D959

「最後の三つのピアノ・ソナタ」(D958、959、960)は1828年の春頃から9月という短い期間に書かれ、浄書が完成されたのは死のわずか数週間前であったという。これら三曲は短期間に集中的に書かれたにもかかわらず、全く異なる性格をもち、後期の内面世界を豊かに繰り広げている。

シューベルトの過ごした時代のウィーンは、フランス革命で市民社会が実現しかけるも王政復古により自由のきかない閉塞的な社会に戻ってしまったことで、人々は自由な世界への改革を求めるよりも日常的なもの、身近なものへと目を向ける風潮にあった。そのため人々は現実と理想との矛盾、偽善的な幸せの中で生活するようになる。ロマン主義の志向がシューベルトなどの音楽家に芽生えたのもこの頃で、音楽家は独自の音楽世界の中で喜び、哀しみ、期待や憧れ、寂しさと孤独といった個人の内的感情を表現するようになった。

シューベルトの音楽はそういった社会背景と密接に結びついていると言える。ピアニストのアルフレート・ブレンデルはこの第 20 番 D959 について、「最も明るいものと最も暗いものが対峙する」と語っているように、建設的な明朗さから深い絶望の淵までを行き来する。こうした大きな広がりを持つドラマ性は、啓蒙思想とは異なる道を歩んだ作曲家シューベルトによって描かれた、驚くべきファンタジーなのである。

### ・第 1 楽章 Allegro イ長調

壮大なる大ソナタの始まりといったように、決然とした力強い第 1 主題は、オーケストラ的な豊かな響きによるものである。叙情的で穏やかな第 2 主題は、前主題より少し空間を狭めたかのように、慎ましく優しい響きとなる。展開部は、第 2 主題から派生したコデッタの主題が繰り返し変奏されながら紡がれてゆく。

### ・第 2 楽章 Andantino 嬰へ短調

A-B-A の三部形式を取るが、同じ形式を取る初期、中期の緩徐楽章よりも大幅に拡大されている。主要主題は、さすらい人の孤独なバスの歩みにのせて、悲痛な歌が切々とうたわれる。中間部は、一転半音階的な悪魔的パッセージが激しさを見せる。この熱を帯びた強烈な中間部について、ブレンデルは「もはや秩序のヴェールなどかなぐり捨てられている」と表している。

### ・第 3 楽章 Scherzo: Allegro vivace イ長調

主部は快活で陽気な表情をみせる軽快な舞曲となっており、装飾的に彩られる。ウン・ポコ・レントによるトリオ部は、ゆったりとした運びの中に左手と右手による対話が聴かれる。

### ・第 4 楽章 Rondo: Allegretto イ長調

ロンド・ソナタ形式 (A-B-A-C-A-B-A-Coda) を取る。

親しみやすく叙情的なロンド主題 (第 1 主題) は、あたたかい響きの中にも突き抜けた明朗さを含んでいる。第 2 主題は、小川のさざめきのような 3 連符にのせて、弾力のある旋律が次から次へ

と歌い紡がれてゆく。長大で劇的な展開部を経て、最後にロンド主題が回帰されるときには、まるで終わりが惜しいかのように、ゲネラルパウゼを含み、途切れ途切れに歌われる。コーダは、そんな哀しみも愉悦感に変え、最後まで一気に駆け抜ける。

## Profile

神奈川県出身。4才よりピアノを始める。横浜雙葉学園を経て東京音楽大学付属高等学校、同大学ピアノ演奏家コース卒業。京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士（前期）課程を修了し、現在同大学院音楽研究科博士（後期）課程在学中。シューベルトの後期ピアノ作品について研究を進める。

第16, 18回かながわ音楽コンクール ヤマハ賞、NHK放送局長賞、第2, 4回クリスタルコンサート出演。第20, 23回日本ピアノ教育連盟オーディション全国大会入選、第4回ピアノフレッシュコンサート出演。第61回全日本学生音楽コンクール東京大会 高校の部 奨励賞、同コンクール全国大会入選。第22回コンサート形式オーディション音楽賞、ジョイントリサイタル「大樹へ」出演。第6回横浜国際音楽コンクール大学の部 第5位。第14回日本演奏家コンクール本選 大学の部入選。第23回日本クラシック音楽コンクール一般の部 第5位。第24, 25回堺ピアノコンクール F部門金賞、入賞者演奏会出演。

東京音楽大学付属高等学校内にて推薦演奏会、トッパンホールにて成績優秀者による東京音楽大学ピアノ演奏家コースピアノ演奏会、学内卒業演奏会出演。日本芸術センターの推薦を受け、ニュースターコンサートとして神戸芸術センターシューマンホールにて初のソロリサイタル開催。第19回京都リレー音楽祭にピアノソロで出演。芦屋サロンクラシック、東梅田教会、マグノリアホールにてザ・ミュージック・センター・ジャパン主催、南風会サロンにてサロン・コンサート協会主催でソロリサイタル開催。ベルギー・日本友好150周年記念演奏会にてシューベルトのピアノ三重奏曲第2番を演奏。第24, 25回京都フランス音楽アカデミーにてピエール・レアク氏のマスタークラスを受講、受講生コンサート出演。

これまでにピアノを藤代のりこ、日比谷友妃子、大西慶子、小高明子、岡田敦子、砂原悟の各氏に、ソルフェージュを笹葉みき氏に、楽曲分析を平井京子氏に、ピアノデュオを弘中孝氏に、音楽学を龍村あや子、柿沼敏江、池上健一郎の各氏に師事。またミッシェル・ベロフ、エリック・タバスティエルナ、マッティ・ラエカリオ、ウラジーミル・トロップ、タチアナ・ゼリクマン、アヴォ・クユムジャン、ピエール・レアク、イヴ・アンリ、ディヴィッド・コレバー、ボリス・ベクテレフ、小川典子、横山幸雄各氏のレッスンを受講する。